2011.11.11

『いつか見た夢？～ドイツ科卒で希望もせずに中東特派員になった私～』

講演者：谷生俊治氏　日本テレビ

文責：串田裕梨
草案作成：半嶺わかな
鵜澤ひかる
石黒昌子　浜口真実
池田薫　早川千絵
森川彩花　小嶋愛

講演では、谷生氏の外大生時代のことから、日本テレビでの就職やキャリアについての話しがなされた。日本テレビでは、予期しない配属を幾度と経験したが、そこで全力で頑張ってきたことで、成果を出し、チャンスも得てきた。希望とは違う部署で働いていても、最終的には、昔やりたいと考えていた「いつかみた夢」を実現できている、と氏は語った。

第１部　これまでの歩み

<u>学生時代</u>

谷生氏は東京外国語大学の先輩であり、ドイツ語学部を卒業している。大学３年生の夏に、２ヶ月間欧州へと、初の海外旅行を経験した。そこで、日本とは違う世界を知って、大きな衝撃を受ける。一方で、旅先のドイツ人の友人と、英語でしか会話することができない自分の不勉強さを思い知った。

また、同年には氏の地元である神戸で、阪神淡路大震災が発生した。氏は、当時の報道で、地名が平気で誤読されたことなどを見て、メディアは真剣に現状を伝える気持ちがないのではと疑問を覚える。さらに２か月後にオウム地下鉄サリン事件が起きると、震災の報道は途絶え、報道がオウム事件一色となった。復興がまだできていない被災地

の現状こそ伝えるべきであると感じていた氏は、さらにメディアに対する不信感や怒りを募らせた。

これらの経験から、就職よりも、さらなる勉強の必要性を感じ、大学院への進学を決意する。学生時代はバイト・サークル・勉学と、充実した生活を送る。

日本テレビ　外報部第一期、社会部警視庁担当時代、外報部第二期

氏は、日本テレビに就職してから、いくつかの部署での経験を積んでいる。最初に半年以上の研修を受けた後、報道部へ配属された。社会部遊軍を経た後、外報部へ配属される。外報部では初の海外出張として北朝鮮に行くなど、充実した日々を送るが、突然予期せずして社会部警視庁担当に異動となる。事件記者としての過酷な日々を送るが、それを良い経験・キャリアの基礎固めとして、前向きにとらえ、全力投球で挑む。この後に、再び外報部へ配属され、インドネシアやイランへの出張取材などを行う。この時に、再び予期せずして、カイロ特派員の打診を受ける。4 年間の任期を引き受けるか迷った末に、カイロに行くことを決心。

カイロ支局時代

氏は、2005 年から 2009 年の間、一人支局であるカイロ支局長に任命され、取材を行ってきた。この間に、イランの核問題、第二次レバノン戦争、ガザ戦争、リビア革命 40 周年など、中東の激動の様子を目の当たりにしてきた。特に氏が印象に残っているのは、自ら手掛けた、紛争の渦中で家族のほとんどを失ってしまった女性への取材である。取材を通して見えた現状に心を痛めつつも、報道者として、世界に現状を伝えるという義務感を感じた。

帰国、現在まで

2011 年初めに、中東諸国で起こった一連の民主化運動である、「アラブの春」の取材を行うため、氏はエジプト・チュニジア・リビアへ出張した。革命によって、カイロで多くの若者が命を落としたという実情を、日本に伝える特集を組んだ。氏は現地事情に精通した特派員として、キャスターの後ろからついて、現地の詳細を説明したり、撮影の事前交渉・アポイントメントをとったりなどしていた。

第 2 部　就職するということ

大学院～就職

大学院の後は就職をすることを決意し、もともと映画に関心があったためテレビ局を志望する。就職活動では、いかに「ストーリー」を紡いでいくかということが、大切であると感じた。自分がなぜ大学に入ったのか、大学で何をしていたのか、これから何を

したいのか、ということが重要であり、外語性の強みと思われがちな、語学力については書類上に書くにとどめるほうがいい。

仕事とは

氏の今までの仕事人生は、「運命の配属」の連続だった。希望とはかかわらず配属された職場でも、やるしかないと割り切って、その時々の仕事を全力でこなしていくことで、成果をしっかりと出してきた。第一希望であった映画事業部での配属を、今でも希望している一方で、これまでの「偶然」的な配属の面白さも感じている。

民法テレビ局で働くということ

民放テレビ局の仕事は、民法ではない NHK の仕事内容と、基本的に同じである。ただ、民法では人手が足りないこともあり、若いうちからチャンスが与えられやすいといえる。

新聞記者とテレビ記者の違いでは、新聞記者の方が、より深い洞察力と個人の技量を求められるのに対し、テレビ記者は瞬発力とチームの総合力が試される。

やりがい

オンエアをみた視聴者、友人からの、「よかった」「感動した」という感想を聞いたときに、やりがいを感じる。世界史の現場、最前線で、自ら伝えられるエキサイティングさがあり、世の中に少しだけ変化や影響を与えられていると感じる。

結び

自分の希望通りの仕事でなくても、一生懸命全力で働いたことでチャンスが生まれたと感じている。そのおかげで、最終的に、現在の自分が、いつか夢見た「世界を駆け回る仕事」をしているということに気がついた。

Life is not about finding yourself, it is about CREATING yourself.

「自分探し」という言葉があるが、氏は「本当の自分」というものがあるのではなく、どんな自分も自分であると考えている。人生は自分を造っていくことであるから、どんな自分になれるかは自分次第である。

質疑応答

Q: 大学生の間にしておくべきことは？

A: 借金をしてでも海外に行き、日本とは違う世界を見るべき。社会人になったら長い休みはとれない。

Q: 学生のときのバイトやサークルなどの様々な活動が今の自分にどのような影響を与えているのか？

A: どんなことでも無駄にはならない。人とたくさん関われたことが自分の経験となった。

Q: ドイツ語専攻卒業後はあまりドイツと関係のない仕事をしているようだが…？

A: その通り。ただ、ドイツのテレビ局にドイツ語で電話取材をしたり、文書を読んだり、直接的ではないが間接的には外大で学んだことを生かせている。